

令和3年度第1回小学校ゼミナール議事録

2021年度4月26日(月)

於：オンライン (teams)

発表者：植田悦司・結城和夏・中林玲奈(広島大学附属小学校教諭)

参加者：小山正孝(広島大学教授)、影山和也(広島大学准教授)、植田悦司(広島大学附属小学校教諭)、他8名

・1. 協議の概要

今回の目的は、附属小学校の先生方が本年度より研究していく内容について議論し、研究の方向づけを行うことである。話し合われた主な内容は、「子どものメタ認知スキルの育成に向けた指導と評価の在り方」である。

・2. 協議の実際と質疑の要約

附属小学校の先生方は、昨年度より大切にされていた「他者を楽しみ続ける子どもの育成」を基盤として、「メタ認知を促す指導と評価の構造化」について発表された。課題として挙げられたのが「分かったつもり」になっている子どもに対する指導である。「分かったつもり」の背景には、自分の間違いに気づくことができていない子どもの姿がうかがえるため、そのような状況を克服するために、自分たちの問題解決方法・学び方を省察する力(メタ認知)が必要である。そこで、指導場面において、問いの形成過程を見たり、対話を生かしたり、子ども自身が間違いに気づけるような展開をしていくことを目指していきたいと報告がなされた。

発表後に行われた質疑応答では、議論を深めるために、活発な意見交換が行われた。まず、「メタ認知の変化は客観的に評価できるのか」という質問が出た。附属小学校では昨年度、選択式のアンケートによる子どものメタ認知スキルの評価を目指していたが、この方法では客観的な評価が難しかったと応答がなされた。その改善案として、選択式のアンケートよりも詳細に子どもの認知の状態を読み取ることが可能となる、自由記述のアンケートによる評価が提案された。一方で、記述式のアンケートを採用する場合には、学年ごとに記述力の差を考慮する必要がある。つまり、記述に対する評価基準を学年ごとに作成する必要があるため、今後さらなる協議を行っていく必要がある。

大学の先生からは、研究の出発点であるメタ認知についての定義を問われた。具体的には、「メタ認知の育成を目指した振り返りの活動において、振り返りをすると、それはもう認知になっているのか」という指摘がなされた。これに答えるには、先行文献のレビューによって「メタ認知とは何か？」に関してのより詳細な理解が必要である。その際には、メタ認知については多くの先行研究があることに留意し、多様な主張の中からどの定義を採用すべきであるのかに関して、さらなる議論を重ねていく必要がある。

(文責：友田勝士)